

首都圏を中心に、全国的に自然破壊や環境汚染が進む中、白石は、東京通勤圏にありながら、豊かな自然と緑を残している。住宅地を一步出れば、昔のままの自然林を残した雑木林や里山が、あちこちに見られる。これらは、市民共有の、さらに後世を含めた財産として保全されるべきものと思う。

私は、自然の中を散策するのが好きだ。市発行の「しろい散策マップ」、季刊誌「ほくそう」や「千葉ニュータウン地図」を持ちながら自転車を乗り回し、自然の中へ繰り出し、自然に話しかけ、自然と対話をするのが好きだ。小鳥のみか樹木ですら会話に加わっている。その時自分は「風」になりきっている。

在職中（高校理科教員）の約40年前、化学部（部活動）を指導して、当時の江戸川の水質検査（汚濁状況）をした。関宿、野田、松戸の各橋上から採水し、学校に持ち帰り、保健所の水質検査基準に基づいて分析した。結果を文化祭にて発表し、公表を博した。当時、水質汚染や環境破壊についてそれ程注目されていなかった時代であり、当時としては目新しい発表だったように思う。その頃から環境保全に関心を持っていた私としては、今回の「自然環境調査員養成講座」は、願ってもないチャンスと思った。それに、いざという時のために、昨年「公害防止管理者試験（国家試験）」に挑戦している。

開発としょん環境保護が調和した町づくりを進めている白井市は私も大好きな街である。今自分が勉強していることが、この街のためになる機会があれば、こんな嬉しいことはない。自然環境全般の保全を図るなかで、特に水質（公害試験の受験科目）に注目している。例えば次のような水域で、水質、水量、枯渇度などはどのように変化しているのか。

神崎川、二重川、金山落とし、、、などの河川

清水口、南山、池の上、、、などの遊水池、貯水池

白井木戸の弁天池、法目の弁天池、みたらしの池、清戸の泉、、、などの遊水池

さらに、下水道の未設置の排水はどのように処理されているのか。工業団地や控除運度から有害物質が排水に含まれて排出されていないか、、、など、自然環境調査員として、貢献できる機会があればと願っている。

白井市自然環境調査員養成講座受講希望

○希望理由：昨年より数回手賀沼関係で湧き水の水質、生物調査を手伝うことになり、もっとよく知りたいと思った。

○抱負：『白井の自然を考える会』では、年数回自然観察会を催していて、そのお手伝いをしていくが、皆の質問などに少しでも答えられたらと思う。

岩本洋子

受講を希望する理由及び抱負

桂島 恵理

・理由について

私は、白井に住んで9年になりますが、市内周辺の自然環境はすばらしいと思います。四季を通して多種多様な動植物を身近な場所で見ることができるからです。

これまで市主催でのウォーキングや自然観察会に参加して、里山を歩いたり、野鳥や野に咲く植物の観察など、日常見つけようとしなければ発見できない、身近にある自然環境の豊かさを実感しました。

日頃から 野山を歩いたり、知らない植物の名前を調べたりすることに興味があり、また残されている貴重な自然や生態が壊されていっている事は、残念なことだと思っていました。

全国各所で自然保護に対する活動は行われていますが、小さな規模でもっと身近な場所で環境保全について何かしたいという思いがありました。

それには専門的な知識が必要で素人では無理ではないかと思い、迷っていたところ、今回の養成講座を知り、是非受講したいと思いました。

・抱負について

自然環境の中で、近年著しく変化してしまった場所が、水辺の環境ではないかと思います。生活排水などによる河川や湖沼の汚濁が進んで、水生の動植物は昔とは一変してしまいました。また、外来の動植物が在来種を駆逐してしまっています。

水生植物の植生の分布、在来種と外来種の分布している割合を調べてみたいと思います。印旛沼、手賀沼の支流にある河川の植生についても興味があるので調べたいと思っています。

また、今回の講座で身についた知識は、自然環境の保全や 蘇生する活動に役立てたいと思います。

自然環境調査員受講希望理由

遠藤 昌久

受講希望理由については、過去に勤務地と実家がある関係から葛飾区の自然観察レポーターを経験しており、その際に体系的に調査方法を理解することの重要性を認識したことです。自分の生まれて育った葛飾区で29年、白井へ来て27年が過ぎました。小学3年生から今迄、甲虫類のカミキリムシを専門に研究中です。

自分の夢は新種発見で 一生のライフワークにしています。これらのカミキリムシを通じて自然環境の大切さ、生物、環境、植物、公害などの取り組みの大切さ、生態系を守る棚田、谷津田などの重要性を身をもって感じています。白井の豊かな自然を現在から未来へ資産として残すことは自分の使命と考えています。

生きてきて感じることは、葛飾区も自然の宝庫でしたが、開発と共に都市補間機能としては大変発展しましたが、その分自然が失われていきました。これからはこれを生活と調和させ、若い世代へ引き継ぐことが大切でありそのためにも調査を生かして実践していきたい。

今までの自分の持っている自然に対する感覚、経験を受講を通じてさらに向上させ、今後の白井の調和ある発展と自然を大切に作る都市づくりのためにも少しでも貢献していきたい。

抱負としては、白井の地の利を活かし、今後日本の玄関である成田空港からも近い、そして都市へも近い中で、緑を感じる事の出来る世界に通じるすばらしい自然環境を残せる白井市づくりに実践行動をしていきたい。

応募理由

緒方恵子

若い頃から植物が好きで、特に野山に咲く植物にひかれ、学生時代には生物部に入り、胴らんをさげ、野山に分け入り植物採集をして、標本などを作ったのが良い思い出です。子育ても終わり、夏には山に出かけ高山植物に会いにいき、花の写真を撮るのが趣味となりました。

自然がいっぱいあるのが魅力で、白井市に引っ越してきてもう25年になります。引っ越した当時は、子供達は朝早く起き、カブト虫とりに夢中になり、春にはわらび採りに行き、リンドウや百合の花が咲いているのを見つけうれしかったのを覚えています。今では宅地開発も進み野原も少なくなりました。でも、白井にはまだまだ自然が残っています。この自然をどのように残し

たらよいのか？一人でも多くの仲間と一緒に考えていきたい。

受講を希望する理由と抱負

永瀬洋子

自然科学を学んだといえば、高校時代の生物しかありません。そうそうたる履歴の方々が集まるでしょうから、これでは、とても合格は無理と知り、志願するのはあきらめました。

しかし、募集要項をもう一度読んでみると、「生物や自然環境の保全に関心があり、市内の環境保全に積極的に提言していきたいと考えている方は、ぜひとも応募を」とあります。勇気を奮って、応募します。

専門的な勉強は経験しておりません。しかし、平成3年に、仲間たちと住民グループを作ったことが大きなきっかけとなり、白井の自然環境に大仰な言い方ですが開眼しました。知識豊富な人の後ろをついていって覚えたに過ぎませんが、植物、野鳥類を認識できました。そのほか、白井の川、湧き水についても水質検査をしてきました。そういう経験をしながら、自分自身が体系的に勉強していないことに、ためらいを感じてきました。ですから、今回はまたとない機会であると思います。

白井の自然環境は、そのほとんどは農家の人たちが維持保全してきたものです。近年の社会構造や人々の意識の変化は都市近郊にある白井市の農業従事者の意識をも変化させています。ましてや、この地域には30年前からのニュータウン開発があります。おまけに、国を始めとする財政不足があります。自然環境の保全はクチで言うほど容易ではないと実感します。

しかし、今の白井市の自然環境の実態調査は必要だし、調査結果が市民の意識によい効果を与えることを願います。保全策は現実と折り合いをつけながら実行されるべきと考えます。

白井市「自然環境調査員養成講座」受講希望の理由と抱負

桜台 相馬唐代子

私は平成11年4月に夫の定年に伴い白井市桜台に転居してまいりました。引越し荷物の整理がすみ、家の周りの植物観察をしながらウォーキングを始めましたところ、付近の植物の豊かさにびっくりしてしまいました。

夫の転勤について広島市、横浜市、広島県府中市といろいろな場所で自然観察をしてきましたが、家の近くで、今まで見たこともないような植物に出合えるのです。もう嬉しくなっていました。その後、もう花が咲いているかしら、実の成る頃かと毎年楽しみにあるいています。

でもそんな貴重な植物が或る日突然ブルドーザーの下敷きになってしまったこともありました。千葉県レッドデータブックに掲載されている、一般保護植物のレンリソウ（マメ科）でした。

又5年前に転居してきた頃たくさん見かけた谷田地区のヤマユリも今年はほんの数本だけになってしまいました。

このままでは貴重な植物がニュータウンからだんだん消えていってしまうのではと、危惧しています。せめて写真に記録しておきたいといつもカメラ持参のウォーキングをしています。私の記録では谷田地区には千葉県レッドデータブック、千葉県カテゴリーB 重要保護生物はフナバラソウ（ガガ仔科）、C 要保護生物はオミナエシ（オミナエシ科）、ノハナショウブ（アヤメ科）、ギンラン（ラン科）、ササバギンラン（ラン科）、マヤラン（ラン科）。カテゴリーD 一般保護生物は、クマシデ（カバノキ科）、コブシ（モクレン科）、ウマノアシガタ（キンポウゲ科）、タチフウロ（フウロウソウ科）、ジャクジョウソウ（イチヤクソウ科）、センブリ（リンドウ科）、ジュウニヒトエ（シソ科）、ヒキヨモギ（ゴマノハグサ科）、カセンソウ（キク科）、ヤマラッキョウ（ユリ科）、キンラン（ラン科）などがあります。

この豊かな自然を次の世代に残しておきたいと常に思っているのですが、どのように提言した

らよいかと考えておりました。

この度広報で白井市自然環境調査員養成講座の受講生募集を知り、生物調査と環境調査の方法、実践を勉強したく応募いたしました。今までは花が好きだから、いつまでもこの場所で咲き続けてと願うだけでしたが、もっと積極的に取り組んで行かなければと思っています。

自然回帰が私の願い

2004年9月5日 清水口 坪井 敏

私は昭和11年生まれの68歳、縁あって昭和54年ニュータウンが開かれると共に親子4人で白いに移住し現在は老夫婦で暮らしています。私の子供時代は大戦のため神戸、東京本郷、学童疎開で千葉市川と転じて市川で終戦、新しい教育を受けるようになりました。後者も何も無いが先生、生徒ともやる気のみ十分私は蝶とその食草の分布を狭い地域ながら調査しました。その後大阪に移り高校、大学を経て働き蜂サラリーマンとなり関東に戻って来て定年を迎えました。時間が出来周辺を見回すと50年前と大違いの自然を目にして驚きました。温暖化の影響か南方系のアサギマダラ、モンキアゲハがいて食草のガガイモが繁茂してジャコウアゲハが姿を消したとか色々な現象が起きている。

これは私が仕事を始めた頃から始まる高度成長、経済最優先のなかで競争で自然を破壊し続けた役40年間の結果であり思いもしないで加害者の立場を生活のため続けてきてしまったのは事実である。時代やその背景と共に自然が姿を変えるのは仕方が無い事であり自然現象の破壊は人間が利便性を追求する限り無くなることはない。

しかし現状を調査分析して変化の内容を調べれば方向を少しでも変えることが出来るのではないか。私は思い、動植物の自然観察を続けて来ましたが正直全くの門外漢、少しでもと思い1998年には白井の鎮守の森の植生を調査して郷土史の機関誌「たいわ」に発表以後も第二のふるさと白井の動植物の変化を見続けてきました。

今回の自然環境調査員養成講座を知り、自然環境調査を初めて基礎から学ぶと共に不得意な鳥類などにも分野を広げたいと思い申し込み致します。もう70歳に手が届く年になりましたが受講して昔の夢を続けたいと思います。

平成17年11月23日

自然環境調査員養成講座受講を希望して

寺園直美

約10年前に白井に引っ越してきた当時はまだ、印旛郡白井町であり市役所でなく、役場だった。家のポストに無料で入れられるコミュニティ新聞に「千葉ニュータウン地区は森と林と池に囲まれ、北欧のような雰囲気がある・・・」(未開発の宅地造成地と調整池のことを言っているらしい。)などがあり、それは誉め過ぎでしょうと思いながらも家の周りの手付かずの緑が結構、気にいっていた。けやき台の調整池ではこどものマムシを見たし富士のひと気のない道をキジが横切るのを何度も見かけた。

しかし、最近では白井駅付近に何年も放置されていた林が切り開かれ大規模マンションが建設中だし、富士地区もミニ開発があちこちで盛んだ。そして前述したような野生の小動物に遭遇する機会が確実に減っているのを感じている。もちろん、開発全てが悪いというつもりはまったくない。ただ、自分の子ども、またその次の世代に少しでもこうした環境を伝えていくために、白井の自然環境が今現在どういう状況なのか、まずは知りたい。そして私が小動物に遭遇した時に感じるワクワクする気持ちを子どもたちに伝える何らかの方法を見つけることができたらと思っている。

特に白井市内の沼、池、川等 水辺の生物（魚類、貝類）の生態について詳しく知りたいです。

自然環境調査員受講希望理由

坂巻 真有美

私がこの清水口3丁目に住み始めて24年になります。
千葉市の実家（現在の緑区）とも違う、公団で開発されたこの土地で3人の子供は安全に楽しい経験をたくさんしました。

緑道をはさんだ住宅街はほとんど車も通らず、子供達はあちらこちらの公園に行き一日中遊んだものです。公園では遊具を使った遊びもしましたが、砂場での泥遊び・草花遊び・木登り・低木樹の間での秘密基地作り、また少し足をのぼしておたまじゃくし探し・ざりがにっぴり・カブトムシ探し・ひつつき虫探し・どんぐり拾いなど住宅街のみならず七次・野口・木・風間部落まで足をのぼして遊んだものです。

子育て中、特別意識することもなく春になればよもぎをつんで団子にし、夏になれば“ウシガエルがないている！へびが出た！せみつかまえた！”と驚き、秋にはすすきを取ってきてお月見をし、冬に雪が降ればかまくらや雪だるまを作り、四季の移り変わりの中で遊びがあり行事がありました。

そんな中6年前より、縁があってI梨園で梨の摘果・収穫のお手伝いをさせていただいています。自分にとって仕事の合間に聞いた梨園のおばあちゃんの話が、実は自然を見直すきっかけとなりました。

自分の住む清水口が昔里山であったこと、調整池は湧き水のある谷津田だったこと、七次部落には周りの山から小川が流れていて、どこの家でも田んぼを作っており手入れのされた川岸の神埼川で遊んだ事、梨の木にはモズのはやにえがたくさんささっていたこと、かぜひきフクロウが面白い声で鳴っていたこと…。

人が住むために山を切り開いて里山という環境が作られましたが、わたしの住む清水口は、農民からわけてもらったその里山を開発して作られた住宅街だったことを知りました。

今、七次部落の田んぼは埋め立てられ、川は護岸工事をして汚れ、梨畑を辞めてしまう農家も増えています。楽しい子育ての思い出が里山開発の上にあったことを知り、緑多い清水口・農民から分けてもらったこの土地をどのように守っていったらよいのだろうか？子供たちがふるさととして帰ってくるこの土地に少しでも自然を良い状態で残してあげたい。

そんな思いから白井の自然の現状を知り、できることから関わっていきたいと思い自然環境調査員養成講座受講を希望しました。

自然環境調査員養成講座受講希望

矢野恵理子

受講希望理由と抱負

キャリアも知識もありませんが、動・植物には興味、関心があり、機会があれば勉強をしたいと思っていました。住んでいる白井の環境調査を通して学ぶことができればと受講を希望しました。現在、幼稚園やガールスカウトで子どもたちと接することが多いので子どもたちへの自然教育のお手伝いができたらと思います。

新見 義隆

13年前に白井に住み始めました。妻と手賀沼へ「蓮」の開花を観察しに行ったときです。湖面は汚水でした。確かに「蓮は泥中で咲く」と言われますが、それにしても、透明を失った水面に咲く、蓮の生命力に感謝しつつも、汚水を垂れ流した人間の行為のむなしさだけが心に残りました。

想えば、少年（昭和29～33年）の頃、手賀沼によく泳ぎに行きました。そのときは、「マシジミ」や「ガシャモク」などが透明な水の湖面からよく見えました。

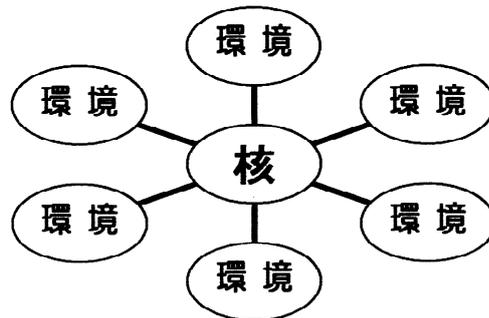
1867年の明治までの農業は食料を中心とした土地を求めた領土拡大にあったと思います。1991年までは、日本が欧米の工業技術を取り入れて来ました。物質から製品に変え、売買する経済が先行し、自然を顧みず、物の豊かさや快適さを求めすぎたのではないのでしょうか。手賀沼の湖面に咲く蓮を観ながら、地球が怒って、人間に逆襲していると思えてなりません。21世紀は、情報を中心とし、もう一度、水・土・空を見つめ、人類の英知と情報を重ねて、自然と共生する「生命」の環境が命題であると思います。

この講座で具体的に体得したいと思い、応募します。

以下、環境に対する私見を述べてみます。

①. 環境とは何か

核を取り囲む、周辺の条件・状況の関係を言うのではないのでしょうか。



1. 人間を核にした場合

人間が自然に囲まれた環境と生存関係を、自然に相反する人間の欲望に従う自然を変える関係です。

2. 自然を核にした場合

自然が人間に囲まれた環境を自然は、人間の征服に抵抗する関係です。

【原因】

1. 人間は自然の気候変化に制約された、雨・風・温度・湿度・乾燥などを、快適な生活を営む欲望の実現のために、あらゆる手段を駆使して行動を起して来た。反面、人間を死に至らしめる病原菌等研究をしながら克服して進歩した。
2. 自然は人間の行動した結果を地球の気候サイクルが元に戻す力（復元力・治癒力）で、調和をして来たが、元に戻す力の時間がなくなり、急激に不調和になった。

【事例】

1. 快適・便利だけを追求し、リサイクルできない新建材の建築物が増加した。
2. 冷暖房等の家電・自動車等は自然との共生に逆らい、人間側の利便性が増加した。
3. 石油化学製品類が増え、腐敗しないために動植物の生存破壊や生態系の激変の方向になった。

②. 人間と自然との戦い

〔過去〕人間は、自然を「征服」する対象物として捉えた。人間の欲望の実現が産業革命から現在までに継続し、自然が持っている復元力・治癒力の時間差を生じさせた。

〔現在〕文明は「物質」の豊かさが「幸福」の物差しとして、使い捨て後のことを考えずに「利益」の論理を優先した姿にある。

〔未来〕人間が生産した「製品」が自然淘汰される「循環型」にしない限り、人類はじめ、「生命」あるあらゆる生物の存亡か、滅亡かの選択を招く恐れを生じる。

【事例】

1. 石油化学製品類を中心に自然腐敗で『土化』する製品開発対策。
2. 乱開発による『水質悪化』を『雨水』の自然浄化で森林保護対策。
3. 有限エネルギー化石資源（石油・石炭・ガス等）から無限エネルギー資源の太陽・風・発酵等に変えて、『空気』汚染と『地球温暖化』の防止対策。

※オゾン対策が紫外線によるあらゆる生物の死滅の方向にあることの認識不足。

【結論】

1. 対象物の自然との共存・共生に変える。
2. 消費者の概念から生活者の目線で「製品」の生産方式を組み直す。

③. 人間と人間との環境問題

消費者の概念は「資本主義の論理」に立脚しています。

一次産業の食材は、「安く・美味しく・サイズの統一・品質・鮮度など」が、商社から、大型量販店へと生産者の顔が見えないシステムです。「大量生産・大量販売・低価格・広範囲な地域への物流」の企業を「良し」とされて来ました。

言い換えれば、量販店の企業は、売るための「利益」になれば良いのです。消費者の消費後の袋・包装紙や使用済みの大小のゴミ処分の仕方までは面倒を見ません。

二次産業も同様です。再使用・再利用・再資源の視点から「製品」の生産方式を組み直すことです。企業は大型商品（自動車・家電等）の買い替え時に廃棄コストを販売価格に含むシステムにしない限りゴミは増えるばかりです。現状は、消費者が買い替え時に廃棄代を払っている。その結果は、大小のゴミの大量排出（不法投棄）による河川・里山・森林に生息する動植物の生態系の変質・減少・死滅の方向に進みます。

その具体的な実態調査をし、ガイドラインを早急に作成しなければならないと思います。

【事例】

1. 「価格」から「安全」の「食べ物」は、地域産直（地産地消）＝農産物鮮度『気』のある食材によって、農業から解放され易くなるが、改善しにくい流通システムの現状。
2. ゴミとなる製品の包装・袋などの減量化への啓発活動の重要性が浸透していない現状。

【結論】

1. 生活者の目線から「製品」の生産方式を循環型に改革する。
2. 対象物の自然との共存・共生に改革している企業を、「生活者」からの評価システム。
3. 自然環境の保全を実施している地域の、データ収集ができる、自然環境調査員の拡充。
4. 空気・水・土壌を汚染させない企業姿勢しか生き残れない「法規制」システムにする。
5. 自然環境に関する住民側に立った法制化・条例化のために自然環境調査データを収集しておく行政姿勢と体制にする。
6. 住民参加で健康な身体、快適な自然環境のためのシステムづくりにする。

2004.9.16

「白井市自然環境調査員要請講座」受講理由と抱負

NPO 法人しろい環境塾 森田考恵

【受講理由】

白井市の環境は、高齢化や農業の衰退と同じスピードで、悪化し続けている。この環境の悪化のスピードをゆるめ、現在残されている豊かな自然を次世代に継承するためにも、現状把握が必要であり、その手段と方法を編み出す上で自然環境調査が必要であると思われる。このため、自然環境調査員要請講座に参加することによって、自らのレベルアップと、社会的及び、環境に対して貢献ができればよいと考えている。

【抱負】

- 1) 白井市の環境の現状把握と生きものとの共生・共存する方法の提案
- 2) 未来の子どもたちへよりよい環境を残す
- 3) 子どもや市民の意識向上
- 4) システムづくりの提案
- 5) 総合的な環境の見方と土地改良のあり方の提案

1) 白井市の環境の現状把握と生きものとの共生・共存する方法の提案

白井市の環境は、年々悪化し続けている。高齢化に伴う労働力不足と後継者不足により、休耕地化が進んでいる。休耕地化した土地には、ゴミが不法投棄され、散乱しているのが現状である。さらに、二重川の河川改修と、その周辺地区の残土埋立など、人間側の都合による自然環境や生きものに対して配慮が感じられない工事形態や、自然回復がはかれない時間的制約が、自然環境の破壊につながっている。生きものとの共生・共存する智恵と方法を自然環境調査からあみだしたい。

2) 未来の子どもたちへよりよい環境を残す

白井市の自然環境は高齢化や農業の衰退と同じ速度で荒廃している。そのため、よりよい環境を未来の子どもたちへ残すため、保存範囲の特定と保全対策が必要であり、保全に向けての自然環境調査がその第1歩となると考えている。

3) 子どもや市民の意識向上

私たちの身近にある自然環境は、当然あるものとして、多くの方が認識しているが、身近な生きものが姿を消したとしても気づかず、その原因を見過ごしている。環境はみんなで守るという意識を向上させるため、白井市自然環境調査の子ども向けバージョンをつくり、より多くの子どもたちに参加してもらうことによって、白井の自然環境を知ってもらい、自然保護活動へと展開させて行きたい。さらに、生きものが生息している環境が価値のあるものであることを、子どもから高齢者にいたるまで認識してもらうため、各地区での説明会や報告会、博物館展示を白井市をあげて行い、より多くの人に足を運んでもらう企画を考える。

4) システムづくりの提案

白井市では、農業を存続させることが白井の環境を守ることに繋がると考える。そのためには、農業を守るための所得保障など、その代償システムづくり（まちづくり）が必要になってくる。農家の存続できる工夫として、地産地消システムづくりを地権者、行政、市民がいっしょになって話し合い、白井市の農業を守るためのシステムづくりを提案していきたい。

5) 総合的な環境の見方と土地改良のあり方の提案

白井市は、沼や川にかこまれた地形である。金山落しは手賀沼水系、二重川・神崎川は印旛沼水系である。このため、手賀沼・印旛沼干拓に伴う土地改良やニュータウン事業に伴う河川改修、手賀沼の水の農業用水利用など土地利用が複雑に絡んでいる。生きものがなぜこの場所に生息しているか、この場所に生きものがなぜ生息していないかを検証し、土地利用の仕方を調べることで、さらに、環境を総合的にとらえることによって、土地利用のあり方を考察し、提唱していきたい。

以上、私が白井市の自然環境調査で行っていききたいと考える方向性を述べた。どこまで実現可能であるかわからないが、自然を残すための手段を1つ1つ講じて行く必要があると思う。そのため、この要請講座を受講し、自らのレベルアップと環境への貢献できれば幸いである。

以上

白井に住んで丸2年、白井市 相馬 なおみ
家から歩いて行ける二重川の富ヶ谷～富ヶ沢が お気に入りの散策コースです。
去年のカメ救出作戦で その二重川が河川改修されると知り、
「なぜ？」「いつから？」「どんなふうで工事をするの？」「みんなその事知ってるの？」と、聞きたい事だらけ。
近場に住んでいるのに何も知らずにいました。

二重川の工事が始まり、周辺の湿地帯も全部工事される事が見て取れ、怖いもの見たさというわけではないけれど、どこまで壊されてしまうのかという不安で、二重川から気持ちが離れなくなりました。
未改修部分の川沿いを毎日歩くと、毎日カワセミの美しい姿が見られました。ゴミが捨てられたり、水もきれいとはいえない二重川で、2羽のカワセミがエサを取り 流星のように飛んでいました。
川岸のアシ原は野鳥の天国で、オオジュリンがカイガラムシをついばむパリパリというおいしそうなお音が さざなみのように聞こえます。
富ヶ沢橋の傍らに看板がありました。河川改修についての説明で、平成6～20年、白井、鎌ヶ谷、船橋の3市が係わる工事と書かれてありました。よく読むとそれは富ヶ沢橋上流部に関する内容で、下流から迫ってくる工事とはまた管轄が違い、1本の川の工事でも複雑のようです。

2月の終わり頃から 千葉県の上野のRDBのランクA1になっているニホンアカガエルの卵塊の調査を始めました。
3月の終わりまでに 富ヶ谷橋～富ヶ沢上流の6地点で、計24個の卵塊を見つけることができました。
1つの卵塊が1000ほどの命です。湿地帯工事のパワーショベルが行き交う中、目の前の小さな水溜りに産み落とされた卵が不憫でした。思わず家にバケツを取りに戻り、一塊を持ち帰りました。
結局 ここで私が数えた24個の卵塊のうち、4月おわりまで生き残ったのは、持ち帰った1塊だけでした。水が干上がったたり、工事で埋め立てられたり、他は全部消失しました。
絶滅のおそれがあるというのは本当のことなのかなと 焦る気持ちになりました。

今年の2月、ちばコープのネイチャーウォークで千葉市若葉区の大草を歩きました。
見たことがないのに、体の奥底から懐かしいと感じる谷津田の風景でした。
ここでアカガエルの卵塊の調査方法を教えてもらいました。
1つ 2つ 3つと数える作業は楽しくて、みんな夢中でした。
また、案内して下さった老若男女の『おおくさの会(?)』の方々の仲の良さ、知識の多さ、学んだ知識を共に確認しあっている様子なども、とても気持ちのいいものでした。
昔ながらの田んぼを作った時の
「深く掘らないといけないから、もう大変だったのよ。腰まで泥に浸かって……」
という苦労話も、
「とっても楽しかったのよ、ほんと。いいでしょう……」
と聞こえてまいります。
こんな会の仲間に入れてもらえたら楽しいだろうな、と羨ましくてたまりません。
白井に戻ってきても 暫くは龍宮城から戻ってきた浦島太郎のような気持ちでした。
大草のようなところが、白井にもあればいいのに……

家で育てたオタマジャクシは、5月末から順次カエルになっていきました。
そのカエルを持って、2～3日毎に故郷の二重川をウロウロし、放す場所を探しました。来春も来々春も来々春も、このカエルたちが卵を産みに来れる 安全な水溜りに戻してやりたいと思って歩きました。子供の通う小学校の観察池にも 許可をいただき放させてもらいました。
小指の先くらい小さなカエルを持ち運ぶのは難しく、歩いても自転車でも車の助手席でも ケースの中のカエルたちは大きく揺れ、おなかを上にしてひっくり返ってじっとしているのを見ると、死んでしまったのではないかと

と心配しました。

1ヶ月半かかり、全部で700匹強のカエルが自然に戻りました。

川があり、県民の森を背景に広々としたアシ原、湿地帯、休耕田。

自然好きの私にとっては、見るだけで嬉しい贅沢な風景です。

工事によって 木が伐られ、生き物が多数消えたといっても、季節を彩る木々や花、鳥の美しさにうっとり……どこからか、モーツァルトのクラリネット五重奏曲が聞こえてきます……まだまだ残っている、大丈夫なんだったってそんな気分させられてしまいます。

いやいや それ程あまりにも当たり前に広がっている無償の自然だからこそ、意識して残して行かなければいけないんだと ゆるんだネジを締めなおします。

身近な公園、空き地、緑の保護区に指定された林でも 宅地化されて行くのを随分見ました。まるごと1つの山の緑が失われ、スーパーと駐車場になってしまう世の中です。油断はできません。

子供が小さかった数年前には 公園の草木にお世話になり、ホテルだカブトムシだと会話を弾ませたお母さん友達も、今では子供の成長と共に スポーツ教室やパート探しが話題の中心です。

「二重川のカメを預かりませんか」と声をかけても、「忙しいのよ。」と退かれてしまい 寂しい限りです。

私も子供の成長と共に “ただの自然好き。” から一歩踏み出し、大人の役目として自然を守ることができればと思っています。

林の木1本自分のものではないけれど、それを残してもらうために、誰かと力を合わせたいと思っています。

4月に『里山をいかしたまちづくり』の講演をされた中村俊彦先生は、
「一般市民と地主の方の間には、価値観も違うし、大きな隔たりがあります。だから 自然を残そうとするなら、行政が間に入り 一緒に推し進めていかなければうまくいきません。」

と 話されました。

卵塊の調査をしている時に、昔は二重川沿いで田んぼをしていたという地主の方と話をしました。

「お宅の田んぼは良くとれるねと言われたもんだよ。でも平成に入ってから、田んぼはやっていないよ。今も自分の土地が荒れるのを見るのがいやで、こうして畑をやっているんだ。」

私にとっては、風景としての休耕田や林ですが、それらはすべて誰かの所有物なのです。当たり前のことに気付くと 今までセリだ、タラの芽だ、栗だ、そしてカエルの卵だと 他所の人の土地を歩き回っていたことがちよつと気になりました。

アカガエルの卵塊をさがしに、この春 名内、平塚、谷田と歩き、二重川以外にも(千葉市の大草まで行かなくても)魅力的な自然がこの白井にあることに気がきました。

それらを大切にしたいと思います。そのために感覚的、懐古的にならないよう正確な知識を持ち、正確な調査のもと、多くの人に価値を認識してもらえればと思います。

そしてそれを、アカガエルが安心して卵を産みに来れる場所を作ることにつなげていけたら……

そう願って、自然環境調査員に応募します。

§ § § §

平成10年 柏市で自然環境調査員に応募し活動したことがありました(岩瀬 徹代表)。

割り振られた担当調査区域を個別に現地調査をして歩き、テーマ生物の生育、生息を確認し、調査報告書を作成するボランティアでした。一般市民が参加した調査だったので、テーマ生物などはわかり易いものが多かったのですが、常識程度の知識の私は、類似生物との区別など、ベテラン調査員に指導を受けながら進めました。

また 主人が理科系で森林インストラクターの資格を持つので、助けをかりることができました。

白井の自然・・・人との係わりの中で・・・

白井市池の上1丁目 相馬 成光

ニュータウンに係わる開発が一巡し落ち着いた中で当地白井に転居してきた。数年前までは柏市に住んでいたが、次々に街中に残された緑の地域が住宅地に潰されていく状況を目の当たりにして、如何に社会経済活動と自然環境の整合が難しいか認識をさせられた。にもかかわらず、転勤先である青森県においては、その豊かな自然の量に圧倒させられた。皮肉なことに自然環境の豊かな青森県民は、自らが置かれているその自然環境がすばらしいことに気がつかず、呼吸する空気のような気がつきにくい・・・（なくてはならないものなのだが）・・・ものとして生活をしているようであった。当然、自然観察会？自然保護？・・・なにそれ？・・・という風に、庭先にニホンカモシカが現れるような地域であるので、首都圏で活動される自然教室やセミナーといった活動は盛んではない印象であった。柏市とは、人が自然に対する活動の温度差が大きく異なっていた。

多くの日本人は、かつて自然の中で生活し、江戸でさえその燃料源として広大な周辺地域に薪炭供給源として里山を抱えてきた。千葉県はその主たる地域であり、人の力で適度に管理された自然の豊かな地域であった筈である。白井周辺もまさしくそのような里山の地域であり、それこそ標高の差は大きくはないが、河岸斜面林や谷地田、里山など多くの自然が残っている。その後の梨畑の転用等もすすみ、住宅地開発も進捗したが、ここにきて一巡した感がある。現在でも里山の面影を残す地域が多く、多くの住民が気がつかないようではあるが、依然として白井の自然は豊かであると思う。そのいった状況の中で、社会生活と自然とのバランスを見出し、後代にあるべき豊かな生活環境を残すことは、私たちの務めである。

そのための第一歩として、現状把握すなわち環境調査は非常に大きな意味を持つ。正しく現在の白井市の自然環境を評価することは、避けては通られない関門である。ややもすれば行政が主導される場合、自治体管轄の境界線までの評価がなされることが多いが、ある意味当然ではあるものの、自然は決して断続的なものではなく、また人の都合で線を引けるものでもないことから、欲を言えば周囲の自治体管轄地域まで少し干渉した評価が必要である。特に二重川などは、船橋市との境にあたり、白井市側だけの環境評価だけでは何ら意味をなさない。この辺は、有識者や自治体の真意に期待したいところである。

決して、原生林や手付かずの自然を残すということ等が最も大事ということではない。人の手の入らない自然環境は地球上あり得ないと考えることが妥当である。ならば、白井市の環境調査とはどのようにあるべきか？を考えるならば、かつての里山地域に梨畑が導入され、その後住宅地開発により様々なカルチャーの異なる住人が移り住んできて、現在は落ち着いた雰囲気にはある現在の白井市の経歴を十分考慮することから始めることとしたい。

しかし、ここには落とし穴も存在する。住民との接点のバランスをどうとるかにおいてである。住民に対し、切り口を誤れば回り道をいくことになる。結果として住民が白井の自然に何ら興味を持たなければ、子供にもその発想が受け継がれることはない。それこそ、「白井には自然はなくてもよいもの」、「自然に接したい時は、信州や那須に行く・・・」などという通念が醸成させられてしまうとすれば、それは恐ろしいことである。

ということは、何を言いたいのか、というと、より多くの住民に白井の自然を知ってもら

うことである。ひいては住民が自ら白井の自然の価値を見出し、自らの住生活を豊かに感じさせることが出来ることになろう。少なくとも都内のマンション生活ではなく、白井の田園地帯の住地に居を構えた住民であるならば、意図するところであろう。

子供は、水遊びをし、ザリガニ取りに興じ、虫取り網を振り回し、カブトムシ取りに興じることが大事である。自然に接することなく大人になってしまうと、その時代になって白井の自然が危機的状況に陥った場合でも、誰もことの重大さに気がつかず、とり返しがつかない事態になることは明らかである。住民の意識あつての環境活動であることが肝要である。

自然活動の大事なポイントとして、等身大で実施することである。背伸びをしない、現状の自然活動者の身の丈・・すなわち、価値観の大きさと等しいサイズで実施することが挙げられる。結果として長続きすることになるし、波及効果も容易に期待できる。活動主体の人々にとって、価値観が共有・納得できないままに、活動を実施させられたならば、いくら素養や意気込みがあつたとしても苦痛の何物でもない。

それを回避することは、何か？といえ、簡単な言葉でいえば「啓蒙」である。よく知ってもらうことこそが、取り組む上での第一歩である。よく知り、自らの意思で方向性が動機付けされたなら、後は自然に流れて大きな力・成果を生み出せる筈である。

住民にとって、様々な価値観・生活観・自然観が存在する中で、今だけ良ければよいという発想ではなく、向こう数十年、いや、もっと先の時代まで、将来の白井市民が、充足の得られる、「ああ、昔の住民の努力で、今私たちが自然の豊かさを感じた充ちたりた生活ができるのだな」と思ってもらえるような活動をすべきと思う。

すべては、コンセンサスの上、活動することである。よって、今回の自然環境調査とはその緒であり一歩であることから、まず最初にするべきことは、

- ①広く自然活動の啓蒙を図ること。・・・自然教室を身近なテーマから。
- ②より多くの人に参加をしてもらうこと。・・・調査のレベル分けをする。

である。

しかし、現在の大人は仕事もあり、子供も進学準備に忙しい。よって、啓蒙活動は固定されたプログラムではなく、選択式のプログラムにし、また環境調査など活動も、よくコーディネートされた分業あるいは選択式の活動とすべきである。すべての人の価値観を充足させつことは不可能であるが、多くの選択肢をもち、なおかつ強力な調整力（推進力）を維持することが、結果として大きな力を生み出すことと考える。5万人の白井市住民には多くの潜在能力が秘められていることも容易に推定できる。

※ ※ ※ ※ ※

とりとめない話しに終始し恐縮ですが、上述にある通り、私にとっては生活の基盤であるサラリーマンとしての仕事の多忙さはあります。しかし、意思として白井の自然には興味を持ち、よりよい自然環境が育まれることを望んでおります。可能な限り、参加し協力を惜しまないところです。稚拙な力ではありますが、多少なりとも足しになれば・・・と応募させて頂くこととした次第です。よろしくお願い申し上げます。

(以上)

自然環境調査員養成講座受講を希望するに当たって

齋藤昭夫

自然環境と人間生活の関係は、切っても切れない関係にある。それは、人間の社会生活が自然環境のなかで営まれているからである。

しかし、1960年代以降の、経済効率を最優先する社会環境の中で、人間がその中で生活を営んできた身の回りの自然環境は次々に破壊されていった。その行為は今も続いている。

そのことは、この白井市においても例外ではない。わたしは、白井市に30年近く住んでいるが、住み始めた当時、一歩近くの林や野原に入ると、たくさんの野草に出会うことができた。ホウチャクソウ、ニリンソウ、キンラン、ギンラン、スマレ、ギンリョウソウ、オミナエシ、トリカブト、ワレモコウなど。今、野生のものはほとんど見られなくなっているのではないだろうか。

その一方で、日常生活が便利になってきていることもまた否定しがたい事実である。

わたしは、保存すべき自然環境と人間の社会生活とをどのように調和させていくかということがこれからの街づくりの課題にならざるを得ないのだろうと考えている。そういう意味で、人間の社会生活を充実したものにしていく上で、自然環境というものがどのような意義をもっているのかということは今しっかりと考えて、必要な対策を講じておかないといけないのではないと思われるのである。

わたしは、年来、自然環境の破壊やその保護について、興味と関心を抱いてきた。しかしそれは、ただ関心を寄せているというだけで、何か行動を起こそうということではなかった。また、自然環境の保護という課題にかかわっていくためには、その理念や手法についての、ある程度の専門的な知識や技術が必要になるのであろうと考えてきた。わたしには今のところそれが身につけていない。機会があればそうしたことについて学習したいと考えていた。

今回受講を希望した理由である。

最近高齢化社会ということが盛んに言われている。そうした中で、健康や生きがいを求めて、朝や夕方、散歩をしている方々が増えてきている。しかし、残念なことだが、白井市にはそうした方々が安心して楽しむことができる場所や施設があまりにも少ない。もし、社会生活との調和を図りながらそうした場所や施設が確保されるならば、一段と充実した生活を送ることができるように

なるのではないだろうか。自然環境の調査が、それらの社会からの要請にこたえるものになるならば、大きな社会的な意義をもつであろう。また、そうした活動に参加することができるならば、自分自身にとっても大きな生きがいになるのではないかと考えている。

また、38年間の小学校教員生活の中で、子どもたちが自然に触れたときに示す充実感を折に触れて感じてきた。しかし、それは学校教育の中だけに求められるものではない。地域の中で、子どもたちが自然に触れ、自然の中で学んでいく機会が増えれば、それは、まさに「生きる力」を育てることに直結するのではないかと考えられる。自然環境の調査や保存・保護という活動は、長い時間をかけてこそその効果が期待できるものであろう。そうした意味で、子どもたちに対する啓発活動は重要な意義をもつのではないかと思われる。

さらに、公民館での社会教育指導員の仕事をする中で、市民の、自然に対する興味や関心の強さを痛感してきた。何度か機会を得て、市民を対象とした自然観察会を主催したが、そのつど、たくさんの市民が参加してくれた。それらの講座を通して、単なる興味や関心だけではなく、自然環境についてのもう一段高い知識や、自然環境を保護したり活用したりするのに必要なやや専門的な技能を身に付けた市民が増えていくことが、どうしても必要なのではないのかと感じさせられてきた。機会を得て、そうした活動の支援ができるようになったら、白井市の街づくりにとって大変有意義なことなのではないかと思われる。

以上が、抱負である。